「青森ねぶた」の重要無形民俗文化財の指定

重要無形民俗文化財の指定は、1976年（昭和51）に始まりました。

●文化財保護法1950年（昭和25法律第214号）第56条の10第1項の規定により、次の表に掲げる無形の民俗文化財を重要無形民俗文化財に指定する。

1980年（昭和55）1月28日　文部大臣　谷　垣　専　一

名　　称	所　在　地	保　護　団　体
青森のねぶた	青森県青森市	青森ねぶた祭保存会
弘前のねぷた	青森県弘前市	弘前ねぷた保存会

1980年（昭和55）1月28日（月）第15904号の大蔵省印刷局発行「官報」掲載

●青森ねぶた保存伝承条例
2001年（平成13）3月27日発令、この資料より割合しています。

●青森県迷惑行為等防止条例
2001年（平成13）3月13日発令、この資料より割合しています。

青森のねぶた

時　期　8月2日～7日

以前は旧暦のお盆の行事の一環として行っていた。

今の祭り期間に定着する迄、時代によって変遷を経ている。また運行コース、運行方法も交通事情など他の条件で違っていた。

今の様な祭り期間になったのは1979年（昭和54）以降ぐらいから。

1　ねぶたの起源

ねぶた祭は七夕様の灯籠流しの変形であろうと言われているが、その起源は定かではない。

奈良時代に中国から入った七夕祭と、古来から北国青森にある習俗と精霊送り、人形、虫送り等の行事と一緒になり、紙と竹、蝋燭（ろうそく）が普及されると灯籠となり、それが変化して扇ねぶた・人形ねぶたとなったのではないだろうか。

古くは、夜に何かシンボル的なものを外から松明等で照らす時代を経て、紙を透かして光り輝く灯籠の魅力、提灯の合理性を知った人たちの知恵の産物こそ、ねぶた祭であろう。

2　ねぶた祭の形態と由来

初期のねぶたの形態は「七夕祭」であった。登場する練り物の中心が「ねぶた」と呼ばれる「灯籠」であり、祭りの最終日に川などに流され、これを「ねぶた流し」と呼んでいた。

この「灯籠」は町内単位に出され、太鼓や笛などの鳴り物入りで町内とその付近を練り歩きながら「ねぶたコ流れろ、まめの葉コ留まれ、いやいやいやよ」などと囃しながら、踊り子衆がそれについて踊った。現在の7日の海上運行に引き継がれている。

3　ねぶたの変遷

津軽においては、ねぶた（ねむた）という言葉が最初に登場するのは、弘前藩庁の「御国日記」1722年（享保7）7月6日5代藩主信寿（のぶひさ）が「ねむた流し」を見学したと記述されている。また、同年には、城下の12の町が単独もしくは合同で合計8ツの「ねむた」を出しているとの記載がある。1726年（享保11）7月信寿が「七夕祭」を、1756年（宝暦6）7月6日には7代藩主信寧（のぶやす）が「七夕祭」を見物したと記録が続いている。

これらは享保年間（1716年～1735年　8代将軍の吉宗の時代）のことであり、津軽秘鑑（ひかん）には1730年（享保15）7月6日に織座（おりざ）（弘前市紺屋町（こんやまち）にあった織物工場）にて津軽の殿様がねぶたを見ると記録されている。

青森におけるねぶたは、解説したものでは「享保年間には油川大浜でねぶたを担いで踊り騒ぐ」とあるがその出典は不明、最初の記録は1842年（天保13）の「柿崎日記」に「7月ねぶた無し、当年七夕祭は子供ばかりにて、町内よりねぶた一切不出」という記述がある。この年は凶作の影響で出さなかったが、町内単位で大人が作り子供たちも参加した毎年行われる行事だったこと、七夕祭としての性格をもっていたことがうかがわれる。

4　地域ねぶた・子供ねぶた

昔は町内からねぶたを出して、町内の寄付で祭りが行われていた。子供たちも、そのねぶた祭の興奮を肌で感じ、「オラだぢも作るべし」ということで子供同士、気の合う仲間で作り始めたのが、子供ねぶたの始まりである。初めは金魚ねぶたや小さな角灯籠に天の川とか七夕と書いた旗ねぶたを持って各家を回った。家の前で「ロウソク一本、ロウソク一本」とか「ラッセ、ラッセ、ロウソク一本、ロウソク一本」といいながら、銭や菓子をもらって回っていた。

今ではユーモア溢れるアニメの世界や歌舞伎の題材など多種多様となっている。形こそ幼稚ですが、まさに「オラだぢのねぶた」なので自慢げに引っ張っている。子供ねぶたを出すことで、町内会の人たちの輪が出来た。

5　祭りの仕組み

(1) ねぶた運行団体とねぶたの運行

戦前

■運行団体

旧　市　内…消防団を中心とした地域単位が大きな組織となり制作・運行。また、浜関係の水産業、海・陸の運送業者、ねぶた愛好家達での運行。

新　市　内…青年団・少年組中心の運行。

■運行形態…連日それぞれの地域・顧客回りをしながら運行。
全体の合同運行は２日間で、６日は夜で、７日は昼の運行。

戦後

■運行形態

1947年（昭和22）に、市は海運局と共催で「戦災復興港祭り」を３日間開催し、各種スポーツ大会や盆踊り、花火大会などと合わせて、ねぶたの運行が行われた。特筆すべきは、この年に新しい趣向として、ねぶたの海上運行が行われたことと、ねぶたの照明が長い間の蝋燭からバッテリーによる電球に変わったことである。

1952年（昭和27）港まつりとして復活し戦前同様の２日間の運行。

1958年（昭和33）に青森ねぶた祭に改正し現在に至る。

1968年（昭和43）から全日程が合同運行となる。

戦後の７日の運行は昼間の運行で、青森駅前に全てのねぶたが集合し太鼓・笛を競いながら堤川方面を目指して運行。全市を挙げての祭りとして盛り上がり圧巻だったという。

また、７日は仕事が早めに終わるか、開店休業、全日休日等職場の対応も様々であった。

(2) ねぶたの運行体系

明治時代の取締規則では「運行に当たりては徐行し馳駆せざるよう注意すること」とある。現在もその方針で行われている。

よく見られる「ねぶたの回転」は進行状況を見極めながら、また、観光客に対しての見せ場を判断しながらの処置方策となっている。

◆扇子持

ねぶたの演出家で笛と扇子でねぶたの曳き手たちに合図を送り、廻す、蛇行する、前後に揺らす等、ねぶたをイキイキと躍動的に魅せ、ときには見得を切ったり、いかにダイナミックにそしてスムーズに先導するかが、扇子持ちの腕の見せどころである。

◆曳き手

4t 近いねぶたを扇子持の合図ひとつで、生き物のように動かしてみせるのが曳き手たちの仕事。扇子持との呼吸の合った動きに注目。

◆囃子方

運行団体の専属制が中心であるが、一部の運行団体では囃子保存団体からの派遣により運営されている。

囃子保存団体…青森正調ねぶた囃子保存会…青森郷土芸能ねぶた囃子保存会
…青森ねぶた囃子保存会に組……等

囃子方は、太鼓、笛、手振り鉦で構成されており、一団体当たり 50 ～ 100 人で構成されている。

◆跳人（ハネト）

跳人はハネトと呼び、一台のねぶたに約 2,000 人のハネトが乱舞する。たくさんのハネトで大きな輪を作ったり、数人で競うように跳ねたりする。観光客も、あちこちの輪の中に引き込まれ大きな一体感に包まれる。

◎跳人の衣装

ハネトの衣装は浴衣にタスキ、オコシ（腰巻き）、シゴキ帯、ガガシコをつけ、頭には花笠、足には白足袋に草履というのが現在の基本的なものである。また、今のように浴衣に鈴をつけるのは戦後になってからである。浴衣は白地を基調とし、タスキ・シゴキ・オコシは赤・黄・水色・ピンクの色を使用する。ハネトの衣装は、青森ねぶた保存会で定められている。

花　笠

『ねぶた』に囃子がなければどうしようもないように、ハネトにも『花笠』が付きものである。花笠を深めにかぶり、鼻や口を豆絞りの手ぬぐいで被ってハネトの渦の中に飛び込む。笛の音の一小節ごとに“ホッ”と奇声をあげ、ラッセ・ラッセの掛け声を叫ぶ、男も女も同じいでたちで思いっきりハネる…その時、自分が自分でなくなる錯覚に陥る。ハネトの集団は地響きをたてながら巨大な生命体となって闇の中へ通り過ぎていく。花笠はハネトたちを大胆に、そして元気にしてくれる大切な小道具なのである。

ガガシコ

ねぶたの先頭を歩く子供達が『ラセ・ラセ・ラセ・ラセ、ガガシコガン』大声で叫び、ガガシコをたたく。そんな風情が最近は薄れたが、酒や水を飲む小道具として使われている。ハネトが踊り狂う時、ゆかたの鈴が鳴り、しごきの先に結び付けたガガシコが舞う。今のガガシコは、昔のものより小さく作られているので、踊っていても邪魔にならない大きさとなっている。

◆化人（バケト）

ハイカラで、面白い。なんとも言えない格好。笑ってほしい一心で扮装を凝らしたバケトたちには、沿道の観客からねぶたに負けないくらいの拍手喝采がおくられる。

(3) 囃子方の道具いろいろ

笛（篠笛）

夏も近くなると、町のあちこちで笛の音が聞かれるようになる。七節からなる澄んだ深みのある音色を出せるのには約３年かかるとも言われ、チカラのいる太鼓と違って女性や子供たちも多い。

◎もともと囃子は、笛を主体に７日分（53 節）が別々に用意されていた。

初　日	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目	最終日（なぬかび）	計
8　節	7　節	7　節	8　節	8　節	7　節	8　節	53 節

初日は“感謝の気持ちを表し”、２日目は“神を迎える”、３日目は“神が降下し”、４・５日目は“歓喜と乱舞”、６日目が“神送り”、なぬか日は“神は天から　悪役や災難を祓って安らかな生活がやって来る”という意味。

明治初期に笛吹き名人と言われた小笠原八十氏〈江戸時代の1847年（弘化４）〉の弟子で南了益 1974年（昭和49 市の無形文化財に指定）ら９人が正調囃子の復興に尽力され、戦後まで新旧市内のねぶた団体がまちまちに、それぞれが伝統囃子の独自性を張り合っていたものを七節に纏めた。1948年（昭和23）には「青森ねぶた正調囃子保存会」を発足、正調囃子の啓蒙普及活動にあたり、1952年（昭和27）から代表節となり正調囃子になった。
囃子には集合・出発準備・小屋出し・進行・ころばし・大休止・小休止・戻り・小屋入れ・雨天中止・雨上り再開・最終日囃子などを含め12種類ある。

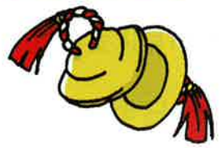
太　鼓

ねぶた期間中、青森の夏の夜空に響き渡るチカラ強い太鼓の音。祭りの最後まで揃って同じ調子で叩き続けるには体力と熟練が必要とされ、勇み肌をみせる『ねぶたの鉄人』たちの独壇場となる。

◎太鼓はいわゆる「締め太鼓」であり、「鋲（びょう）打ち太鼓」は使用しない。
締め太鼓の胴部（ドウガラ）は板を円形に組み合わせて作る底のない桶のような形状で、両側には主に牛皮（馬皮もある）を張った丸鋼の枠（タガ）を装着し、麻太紐（しらべ）で締める構造でその締め方の強弱、径の大きさ、革の厚さ、天候で音の高低強弱が違う。

◎桴（ばち）ねぶた囃子には「とよし・とう」いずれも多くは輸入品が使われている。
要するに、堅さや重さが適当で、ささくれが出来にくいような木材が使われている。
籐葦（とよし）・籐（とう）……1.5cm 以上の太さで竹に似たような節があり、1.3m 位の長さで売られている。
その他の材質は、檜・桜・朴・ブナ・楢・楓・樫・桐…あげたらきりがない。

手振り鉦



笛と太鼓と手振り鉦（ジャガラギ・テビラガネともいう）が揃ってねぶた囃子となる。笛と共に女性や子供たちも多い。ねじり鉢巻（はちまき）に揃いの半纏でシャン、シャンと粋な囃子で練り歩く。

◎鉦は、旧市内では無かったが、鉦はお山参詣の囃子に付随していたものなので、その囃子に近い駒込など新市内の囃子の影響ではないか…
1947年・48年（昭和22・23）頃荒川青年団がねぶたを市内で運行した時囃子に鉦が付いていたが、どのねぶたでも使われるようになったのは1965年（昭和40）近くから。
材料は銅と錫に亜鉛が少し入った合金「砲金　青銅」。あるいは、銅と亜鉛の合金「真鍮（しんちゅう）」で出来ている灰皿みたいな形をしている。

半(袢)纏

囃子の揃いの半纏は1970年（昭和45）頃から、それ以前は浴衣や半纏など様々であった。出場団体が衣装の統一を検討する中から派生したものである。

◎用途やデザインによって「長半纏」「袖なし半纏」火消し用の「刺し子半纏」文字や紋の入った「印半纏」などがある。このほか囃子方は鯉口シャツ・腹掛け・股引・足袋・鉢巻きなどの衣装も着用する。

6　ねぶたが出来るまで

(1) 運行団体と制作者の契約

・ねぶたを出す団体（企業・町内等）から「ねぶた師」と言われる制作者に、人形の台上げまでの依頼、更に飾り付け（化粧まで加えて）の契約となる場合もある。
・「ねぶた師」は契約に当たっては、依頼主からの希望作品また自分としての推奨作品等々を出し合っての話合いが持たれ、決定に基づいて下絵制作に当たる。
この下絵を設計図として顔・手足等細かい部分の制作に入る。
その段階では制作者の頭には既に全体の構造・色彩等が決まっている。
題材は、依頼主・ねぶた師の意見の一致をみるまで話合いがなされ決定される。
・制作に当たる人数は、ねぶた師を中心に電気・紙貼り等々で延べ300人が見込まれる。

(2) 運行団体の運行予算

・1台当たりの費用は、各団体ともバラつきはあるが、総額約2,000万円と言われている。そのうち、ねぶた師の報酬は約400万円、その大半を材料費、人件費（電気関係・紙貼等）に費やす。
従ってねぶた師は本当にねぶたが好きでないと出来ない。
・ねぶたを出す団体は「ねぶた師」に対しての支払いの他に次の経費が見込まれる。
①小屋の負担金並びに補完する諸費用（夜警、宿直等）
②台車の組立て費・移送費・保管費
③運行時点の諸経費（曳き手、囃子等の人件費・給食・衣装費等）
④発電機の借り上げ・軽油・ダクト関係等
⑤備品（太鼓台車・水車・提灯、飾り付け）の調達・補完・補修等
⑥自己ねぶたのPR資料作成等々

(3) 各団体の運行組織

各団体の取組みとして、担当者の職務役割の明確化、出場前・出場対策等を徹底する。団体ごと大同小異はあるが、「制作班」制作者に委託する以外の台車・囃子関係等の制作、「運行班」ねぶた・囃子関係の曳行、「統制班」ハネト・カラス対策、「囃子班」囃子の管理・指導、「内務班」備品管理・補修補充・給食関係等々を明確に組織化している。

(4) ねぶたの面と送り絵

面

彫刻と書道と絵、三位一体の技を駆使して作り上げる『ねぶた』。
ねぶた師たちの魂を吹き込んだ顔は『ねぶた』の命。魂を吹き込まれた、ねぶた祭の主役は、ハネトの熱気と迫力の囃子と共に観る者を圧倒する。
ねぶた師の気迫がねぶたに乗り移る。

ねぶた師

ねぶた作りをライフワークに選んだ、ねぶた師たちの技と気迫は、ねぶた祭の伝統を渾身の力作で昇華する。その暮らしは、ねぶた作りに1年を費やす。
毎年、ねぶた祭が終わると共に翌年のねぶた作りの構想に入り、冬の間に時代考証など資料を集め、ねぶたの設計図となる下絵の仕上げをする。正月明けから4月までは顔や腕など部分の下ごしらえに費やす。そして桜の散るのを待つように作業はねぶた小屋へと移っていく。

送り絵

ねぶたの後ろ姿は、送り絵、見送り、送りねぶたとも言われる。
夜の闇に小さく消えてゆくその姿は、走馬灯のように過ぎて行く夏を惜しむかのように哀愁を誘う。

(5) 制作日数

制作日数は1台当たり約3ヶ月。但し、小屋内での制作は5月半ばからとなるため、細かい部分はその前から手がける。
ねぶた師は、祭りが終わると次の日から来年の構想を考え始める。年の終わりには具体案が出来、制作の依頼側と話が付き次第、顔や手足の制作にかかる。
小屋に入ると急ピッチで作業が進み、追い込みで徹夜の連続、台上げ、飾り付け、化粧、時にはギリギリまでの作業の連続となる。

(6) 制作工程

1 題材と下絵

題材は歌舞伎の名作の場面・歴史物語等々から選ばれる。中には現在の社会状況を加味したものもある。構想がまとまると鉛筆で下書きして色を付ける。下絵はねぶた作りの要と言われ、設計図そのものである。

2 細部の下ごしらえ

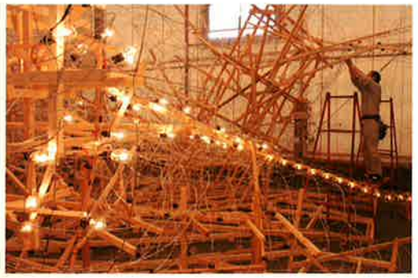
「顔」・「手」・「足」・「刀」・「槍」などの細部をあらかじめ作っておく。割出(わりだ)しには、比例式で寸法を計算する。題材が早く決まれば、小屋がけが始まる寸前まですすめておく。

3 小屋がけ

ねぶた小屋の大きさは、横幅11.5m・奥行き11.5m・高さ8.5mで、協会の管理で4月中旬に建てられる。なお、各人の小屋入りはラッセランド内の所定の場所に入ることになるが、複数のねぶた制作の場合、制作グループ等々が配慮されている。

骨組み 4

骨組みは角材で支柱を組み、針金で形を作り、事前に準備している顔面・手足等を配置しながら進められる。(使用する針金の総体使用量は150kg) 昭和30年頃までは、針金を使わず竹で骨組みを作っていた。



5 電気配線〈照明〉

昔はろうそくを使っていたが今では専門の配線工を使ってねぶたの内線に20～100Wまでの電球や蛍光灯を600～800個ほど取付ける(総容量は約2万W)。電源として発電機(軽油使用・40kW)を台車内に固定し、排気のダクト関連装置を設置。

6 紙貼り

和紙(奉書紙(ほうしょし))約2,500枚を使用する。紙1枚は新聞紙片面の大きさで延べ1,400mとなる。針金に糊(木工用ボンド)で一区画ごとに貼り付ける作業で約10～20人を必要とし、紙貼り専門のオバさんに役割が回ってくる。中でも顔面貼り等の重要部位は経験豊かなベテランの作業となる。ここまで来ると、かなりねぶたらしくなる。

書割(かきわり)〈墨書(すみか)き〉 7

墨で形を取る。純白のねぶたに墨で顔や手足、衿(えり)、帯、着物の柄などを書き分けていく。迫力をかもし出す筆法で書き分けていく。

8 ろう書き

着色の前に色の混濁(こんだく)を防ぐため、パラフィンで縁取り作業をする。着色材料は染料と水性顔料だが、ねぶた師それぞれの独自の調合があるとのこと。筆やエアブラシで着色をするが技法も秘。

色づけ〈彩色〉 9

残った白地に色を付ける。染料と水性顔料を使い、筆書きまたはスプレーで染色する。これでねぶたの本体は完成。

台上げ・飾り〈化粧〉 10

装飾の施された高さ2mの車つきの台に、50人がかりでねぶたを上げる。これで全体の高さは5m位。

ねぶた師からの「面の方向・バランス等の指示」で1年がかりの人形が立ち上がる。台車に高欄(こうらん)を付け・引き手を布で巻き・団体名の看板取付・発電機の据付等々で出来上がり。

〔関連〕運行する台車(高さ約2m)に乗せて全体の大きさは高さ5m・幅9m・奥行き7mの制限枠の中での制作になる。台車自体は、総重量約4tを支えるために大型車両の車軸・タイヤを活用し、発電機を収容するスペースを配置しての作りになっている。

7　その他の関連事項

(1) 前ねぶた

いつの頃からなのかは定かではないが、大型ねぶたの前を行く先導役である。テレビアニメのキャラクターや商品等、そのテーマや形も様々で、ねぶたとその団体のPR的存在となっている。

(2) ミスねぶた

ねぶた祭に、華を添えるミスねぶた。毎年6月に、コンテストが開催され、青森市のPR、各種催事のマスコットガールとして活躍する。

(3) 制作、運行に関する諸行事

①安全祈願祭
祭り期間中と制作作業等の安全祈願を協会他関連団体によりラッセランドにて実施。

②ねぶた入魂・魂抜
各団体で吉日に、神主を呼びそれぞれ実施する。吉日に行うことは、ビル、家屋建築時と同様に縁起を担ぐことである。

③進発式等々
形式は変わってもそれぞれ実施している。

(4) 祭り終了後の「ねぶた」は？

①出場団体ごとに異なる。その1つは「自社用のPR用」として再活用をする。
その時は県内外に移送するために解体・輸送・現地再組立て等が発生する…
ねぶたは大型10tトラック4台（ウイング型式）に積み分けされる。

②観光協会・運行団体協議会が、他の地域の祭り・イベント等の主催者との話合いの中から県内外に移送するために解体・輸送・現地再組立て等が発生する…
ねぶたの代価は別途協議事項

③通称「ねぶたの里」（株）青森自然公園ねぶたの里（民間の営業行為の会社）が、展示しているものを設置替えするために数台を引き取る…
ねぶたの代価は別途協議事項

(5) ねぶた各賞

「田村麿賞」から「ねぶた大賞」へ

1962年（昭和37）制定の、「田村麿賞」の名称が1995年（平成7）度より改称された。坂上田村麿が蝦夷征伐のため現在の青森県域に遠征した史実やその際にねぶたを用いたことが立証出来ないこと、田村麿と蝦夷征伐を結び付けてのネーミングは、民族の人権上からふさわしくないこと、国の重要無形民俗文化財指定にあたっても「ねむり流し」の習俗と明記されていること。また、市民意識の変革など、各界各層の意見、世論をふまえた結果、1995年（平成7）度より、青森ねぶたの最高賞は「ねぶた大賞」となった。

〈総　合　賞〉

「ねぶた大賞」
ねぶたの制作を主体に、運行・跳人、囃子など総合的に最も優れている団体に与えられる賞。

「知事賞」ねぶた大賞に次ぐ賞

「市長賞」知事賞に次ぐ賞

「商工会議所会頭賞」
市長賞に次ぐ賞

「観光コンベンション協会会長賞」
商工会議所会頭賞に次ぐ賞。
（選考にあたっては、永年の功労を加味する。）

〈部　門　賞〉

「最優秀制作者賞」
ねぶたの制作が最も優れている制作者に与えられる賞

「優秀制作者賞」
最優秀制作者賞に次ぐ2名に与えられる賞

「運行・跳人賞」
伝承性ある運行と、跳人の衣裳・躍動感・かけ声等による集団のまとまりが、最も優れている団体に与えられる賞

「囃子賞」
ねぶたの囃子が最も優れている団体に与えられる賞

〈特　別　賞〉

「海上運行」　海上運行の為の特別賞で、運行団体協議会の推薦により奨励委員会が決定

「推　　賞」　運行団体協議会の推薦の中から創意工夫が見受けられた「ねぶた」

8　幻想の海上運行

7月7日は天の川が輝いている。この夜、人々は昔から、自分たちの汚れを祓うため、願いを託した灯籠を川や海に流し浄めた。

青森ねぶた祭の最終日には大祓いといって明治・大正・昭和と戦前は堤川沿いを中心に形は変わりながらも「ねぶた流し」が行われていた。

戦後になり1947年（昭和22）「戦災復興港祭り」が8月20日から3日間開催され、この年から新しい趣向として「ねぶた」を艀に乗せて湾内を周遊する海上運行が実施され、参加ねぶたは少なかったものの、海岸に集まった大観衆の熱気で最高の盛り上がりを見せたといわれている。

翌23年の青森市制施行50周年記念「港祭り」では、前年好評を博した海上運行には6台の参加があった。

その後、海上運行は1973年（昭和48）で中止されるが、1983年（昭和58）に復活となり、3台が波間にただよい、10年ぶりに観衆を魅了した。以後、一部選考の変遷はあるが、現在は大賞・知事賞・市長賞の受賞ねぶたを選考の基準として、5台のねぶた2008年（平成20からは7台に）が7日の夜に海上運行され打ち上がる花火とともに祭の最終日を飾っている。

9　金魚ねぶた

(1) ねぶた祭に出現した時代

津軽地方に伝承されている民俗行事である「ねぶた祭」に欠くことが出来ないものに「金魚ねぶた」がある。金魚ねぶたは、本来は灯籠として作られたもので、その歴史も古くはないようである。

それが何時の時代に作られ、また、何時からねぶたに組み入れられたものであるかは判然としないが、組み入れられたものとしては、比良野貞彦の1788年（天明8）「奥民図彙」の子ムタ祭之図、1861年～64年（文久年間）平尾魯仙の「津軽年中風俗画巻」に描いているねぶた運行の様子によると金魚がたらいに浮かんでいる型のものが見られる。また、今純三「青森県画譜」ねぶた運行の光景にも記録されている。

これらから、江戸末期には既に金魚ねぶたが存在していた事になろう。

(2) 金魚ねぶたの話ッコアレコレ

・幸せを運ぶ魚

武家屋敷を覗いた人から「お武家様の池には、気味の悪い生き物が住んでいる。…シッポは二つ三つに裂け、背びれが無く、頭はアバタで斑や赤色をしている。なお、その生き物は苦しそうに血の帯をひきずって泳いでる」との金魚を初めて見た人々から噂が振りまかれ、城下町は大変な騒ぎに……

これを耳にした武家の人々、竹で丸を作り、紙を貼り、目に黒墨を入れ「これは幸せを運ぶ魚なんだよ」と噂の誤解を解くために配って回った。

それを貰った子供たちは玩具として手に持ち走り回って遊んだといわれている。金魚作りは藩の産業でもあり、弘前の武家の内職であり、金魚は名のとおり金を運ぶ魚、金運魚。つまり幸せの魚だった。

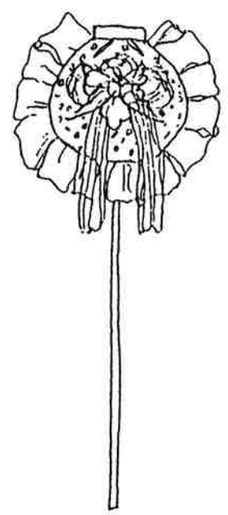
・青森の金魚ねぶた

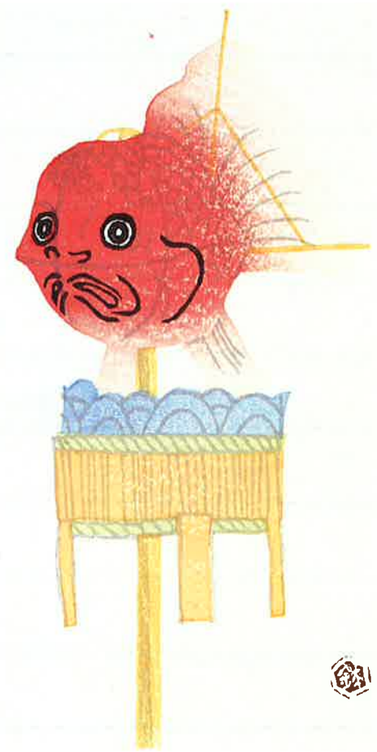
青森の金魚ねぶたは、造花店（葬儀屋）が内職で作り始めたとされ、全体として丸みをおび、鱗が荒く、目の間隔が開いているので剽軽な顔であり、背びれは無い等々の特徴がある。

金魚ねぶたの左右から下がっている紙のヒラヒラは、金魚がパクパクとやった時のエラから出てくる泡をイメージしてデザイン化したものであるといわれている。また、丸の大きな目玉の周りに、蝋でボツボツとくっついているのは「金魚の雄」の発情期にでる追星といわれている。金魚ねぶたは昔から和紙を貼って作られていた為破れやすく、特に雨に当たるとトケる、そのトケた格好たるや、刺身用にオロされた残りの鯛のアラのようで、見窄らしいものになっていた。それが駅や商店の軒先に並ぶものだから、ナヌカ日（七日々＝祭最終日）を過ぎた青森駅・新町一帯は、古川の魚市場の延長にも見えた。～そのくらい見窄らしかったのだ。

いつしか、紙の金魚ねぶたも街から姿を消し始め、最近の大量商品化に伴って、1980年～81年（昭和55～56）頃からビニール製の「金魚ねぶた」が作られるようになり、今では、平成の街並みを「ビニールの金魚ねぶた」が泳ぎ廻るようになった。

人形ねぶたが造形・描写で動的なものであるのに対して、金魚ねぶたは静的な感じがするが、これはまさに祭りの在り方を表しているともいえるのではないか。



巾着ネブタ

金魚ネブタ